

令和7年度

静岡県教育研究会 書写教育研究部 夏季研究大会

書写研修部テーマ

「正しく整えて書くことを生活に生かそうとし、文字文化を大切にする子を育てる書写教育」

【小学校】研究テーマ

正しく書くことを、生活に生かす書写指導

～子供たちが自ら追求したくなる授業づくり～



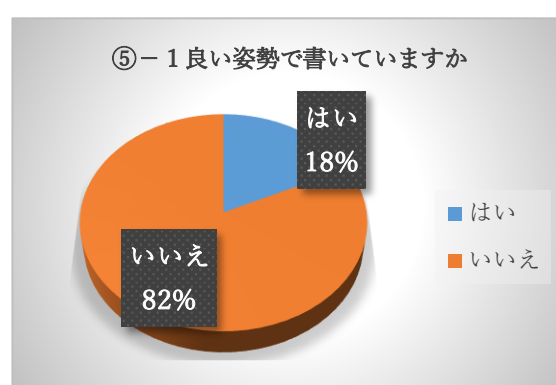
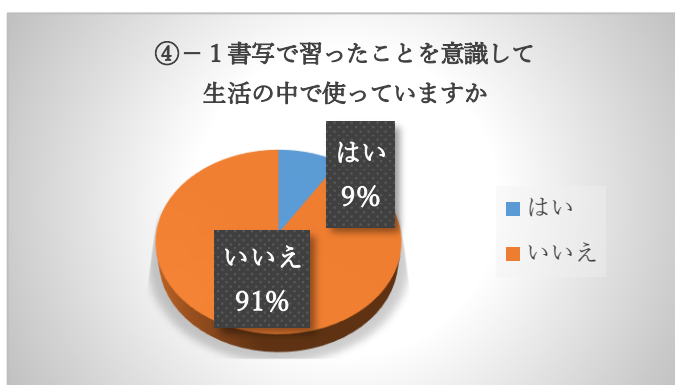
河津町立河津小学校

村松 未央

1. 研究の実践のねらい

(1) 児童の実態

本学級の児童は、書写の時間の準備から片付けまでの単位時間の流れが習慣化しており、落ち着いて取り組むことのできる児童が多い。その時間の基準に注意しながら学習に取り組める児童がいる一方で、整った文字を書くことが苦手であったり準備や片付けに時間がかかったりするという理由で書写の授業を好まない児童もいることも事実である。これまでの書写学習に対する子供たちの傾向をつかむためのアンケートでは、以下のような結果が得られた。



設問1「書写の授業は楽しいと思いますか」楽しい（64%）楽しくない（36%）

・上手に書けるとうれしい・筆は難しい・上手に書けない

→上手に書けることが書写の楽しさであると考えている。

設問2「文字を上手に書きたいと思いますか」書きたい（82%）そうでもない（18%）

・上手だねと褒められたい・上手に書けると気持ちがいい・大人になって困るから・面倒くさいから

→認めてもらいたい、現在も将来的にも必要性を感じている。

設問3「書写の授業で大変と感じることはありますか。」ある（100%）

・筆は難しい・バランスが取りにくい・手が汚れる・片付けが面倒くさい

→準備や片付けも含めて、毛筆に対する抵抗感を感じている。

設問4「書写で習ったことを意識して生活の中で使っていますか」意識している（9%）意識していない（91%）

・書写のことを普段は思い出さない・筆と鉛筆は違う・筆は書写の時間だけ使うから

→書写で学んだことは書写の学習の中だけにとどまって、普段の生活に生かす良さを実感できていない。書写の授業での学びと他教科等におけるつながりはほとんど感じていない。

設問5「良い姿勢で書いていますか。」良い姿勢をしている（18%）していない（82%）

・良い姿勢は疲れる・寄りかかりたい・ノートを斜めにして書くので体も頭も斜めにした方が書きやすい

→良い姿勢は疲れる姿勢、無理をして頑張っている姿勢という意識をもっている。手元に集中して緊張しながら書くためか、すぐに疲れてしまっている様子がうかがえる。また、正しい鉛筆の持ち方をしていないため、文字を書いている鉛筆の先をのぞき込む様な姿勢をとっている児童も多い。

設問6「左手（左利きの児童は右手）を使っていますか。」使っている（77%）使っていない（23%）

・体を支えるため・疲れるのでだらっとしてしまう

→効き手と反対の手を使うのは、ノートや紙を押さえるというより、体重を掛けたり肘をついたりするためであ

る様子がうかがえる。

上記の結果から書写学習には好意的で、上達したいという思いで取り組んでいるが、技能的な面で課題を感じていたり、学んだことを生活場面で生かしたりしている児童は少ないことが分かった。実際、ノートの字は雑なものが多く、日常に十分生かしていないと言える児童もいる。授業で理解したことを普段の生活に生かす良さを実感することができていないといえる。

学習に取り組んでいる児童の様子を振り返ってみると、①筆記具の持ち方や、文字を書く際の姿勢②文字の組み立て方への意識③書写の授業での学びを普段の生活に生かす良さを実感できていないことの3点に課題があることが分かった。

（２）テーマ設定の理由

学習指導要領第5学年及び第6学年の書写に関する事項は「1〔知識及び技能〕（3）我が国の言語文化に関する事項エ（ア）用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと（イ）毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと（ウ）目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと」である。

書写に関する事項を指導していく上で、すべてにおいて重要になってくるのは書く際の姿勢である。近年、机と顔の距離が近い児童が目立つこと、また筆記具の持ち方に乱れがあることから、書く際の姿勢を再確認する機会を設けることが、正しい文字を書くきっかけにつながるのではないかと考えた。そして、さまざまな場面を通して正しく書くことを意識し、文字の素晴らしさ、自分で文字を書き表すことの楽しさを体験してほしいという思いから、このテーマを設定した。

2．研究仮説

このテーマを設定した上で、本研究において3つの研究仮説を立てた。

- （1）正しい姿勢と正しい筆記具の持ち方を定期的に確認することで、正しい姿勢は楽に書くことができる姿勢であることが分かり、より読みやすく整っていて正しい文字が書けるのではないかと考えた。

学習指導要領第1学年及び第2学年の書写に関する事項「（ア）姿勢や筆記具の持ち方を正しくして書くこと」を入学当初から1年担任は特に意識し指導にあたっている。1年生の時にはできていたことが、学年が上がるにつれて、段々できなくなってくる児童が多い。6年生も自分の筆記具の持ち方がおかしい、正しい姿勢ではないと理解はしているが、文字が書ければ十分と捉えている児童も少なくない。教科書の最初に5年間で学んできた大切なことが凝縮されている。そのページを見返し基礎から再確認し、さらに「しょしゃ体操」や正しい姿勢の合い言葉である「ぺたぴんぐう」を行うことで、正しい姿勢は疲れる姿勢、無理をして頑張っている姿勢ではなく、楽に書ける姿勢であることを理解できるのではないかと考えた。

- （2）毛筆学習においても、他教科と同様に課題意識をもち、学習を進めることを大切にしていくことで、書くことをより身近に捉えることができるのではないかと考えた。

文字を上手に書きたい、認めてもらいたいと考え、個別練習による技能習得にじっくり取り組める児童が多い。しかし、書写の苦手な児童にとって技能習得だけであると苦しい活動になってしまうことが予想される。書写は特別な授業ではなく、他の教科と同じく課題があり練習の機会があり、まとめがある。試し書きを行い、児童が自分たちの言葉で書き方を教えたり、アドバイスをしたりと学び合いをしていく。そして自己批評を行うことで、

個人内での学びの成果を意識でき、書くことに対しての苦手意識を少しでも払拭できるのではないかと考えた。

(3) 筆ペンを廊下に常設し、筆は特別な筆記具ではないことや手書きの良さを知ったり興味をかきたてたりすることで、児童自身の生活場面の中に生かす力を身に付けられるきっかけになるのではないかと考えた。

筆は書写の時間にだけ使う道具であると捉えている児童が、筆ペンを日常的に使用し休み時間に教え合ったり練習をしたりすることで身近な道具であると捉えていくことができるのではないかと考える。また、めあてカードを運動会のスローガンの周りや廊下に掲示したり下級生へのプレゼントのしおりを書いたりすることで、相手意識をもって書くことの良さを実感できるのではないかと考えた。

以上3点の研究仮説をもとに3つの実践を行った。

3. 実践内容

(1) 正しい姿勢と正しい筆記具の持ち方・合い言葉「ぺたぴんぐう」の確認、「しょしゃ体操」の導入

〈方法〉教科書の最初に5年間で学んできた大切なことが凝縮されている。そのページを見返し基礎から再確認をした。さらに「しょしゃ体操」や正しい姿勢の合い言葉である「ぺたぴんぐう」を行った。

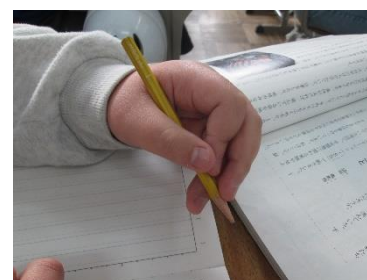
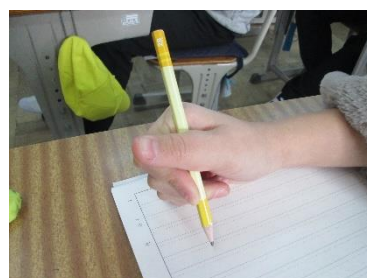
〈現状〉

筆記具の正しい持ち方ができない児童が多く、姿勢も机と顔の距離が近い。左手で紙を押さえないで書く児童もいる。「ぺたぴんぐう」の合い言葉は全ての児童が覚えてはいたものの良い姿勢は疲れる姿勢、無理をして頑張っている姿勢という意識をもっている。手元に集中して緊張しながら書くためか、すぐに疲れてしまっている様子がうかがえる。また、正しい鉛筆の持ち方をしていないため、文字を書いている鉛筆の先をのぞき込む様な姿勢をとっている児童も多い。

〈結果〉

正しい筆記用具の持ち方ができていた児童は、23人中7人と予想以上に少なかった。親指が人差し指よりも前に出てしまっていたり、中指と薬指の間から筆記具が出ていたりする持ち方も確認された。また、書くときの姿勢について確認を行ったところ、背筋はぴんと伸びているものの机に右手の肘をつき左手を添えていない児童や、足を組んで椅子に座っているため、正しい姿勢で取り組めていない児童が多数いた。

小学校入学時に学習した「正しい姿勢」「鉛筆の持ち方」について書写の教科書を見返すと共に、教室にも掲示し意識付けを行った。①鉛筆の削った部分に人差し指がかからないようにする。②人差し指が親指の上になったり、親指が人差し指を巻き込んだりしないようにする。③親指・人差し指・中指の3本で均等に支えると記されている。その①～③の手順に沿って、確認した。正しい持ち方で筆記具を持ってみると「持ちづらい」「手が疲れる」「いつも以上に力が入ってしまう」などの声が上がったり、「いつから持ち方が崩れてしまったんだろう…。」と自分自身の持ち方に疑問をもったりする児童もいた。また教科書の『よいしせい』の通りに実際座ってやってみたが、使用している机・椅子の高さが合わないことも大きく影響していると見られた。適切な机・椅子



の高さが学習全般に影響するため、定期的に確認することが大切であることを実感した。

〈考察〉

姿勢や筆記具の持ち方については、長い間積み重ねてきてしまった部分があるため、簡単に矯正することは難しいことを改めて知った。しかし、今回のように定期的に姿勢や持ち方を確認することは、意識を高めることができるとともに、客観的に自分自身を見つめ直して改善できるよい機会となった。また、小学校1年生の教室に掲示する事が多い「正しい姿勢」「鉛筆の持ち方」のプリントは、再度確認する際には非常に有効な手立てであったように感じる。しかし、残念なことに意識しなければなかなか改善できないことが分かり、注意を促されれば正しい姿勢や持ち方をすることができるが、すぐに崩れてしまうのが現状である。



1年生では入学当初から、正しい姿勢、鉛筆の持ち方を意識させながら指導を行っているにも関わらず、学年が上がるにつれて崩れていっている。姿勢や持ち方を定期的に見直しする機会を設ければ、早い段階から姿勢や持ち方の乱れを改善できるのではないかと感じた。大人になって後悔するのではなく、小学生のうちに正しい持ち方を身に付けられるようにしていきたい。

また、書写に必要な筋肉がほぐれ血の巡りが良くなり、良い姿勢を維持できる「しょしゃ体操」は、書写の時間にだけでなく他の授業でも行い、リラックスした状態で授業に臨めるようにしていきたい。

全ての時間を通して、書くときの姿勢や筆（鉛筆）の持ち方を合い言葉や掲示物で確認し、他教科の学習でも意識できるようにすることで、日常生活に生かすことができるようにする。更に既習事項が生かされた他教科のノートを紹介したり称揚したりすることで、日常生活に生かす良さを味わうことができるようにしていきたい。

（2）追求したくなる授業の手立て

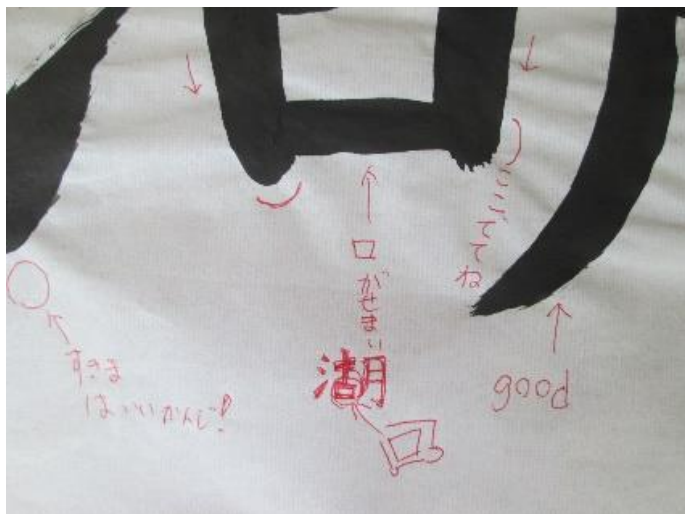
学習指導要領第5学年及び第6学年の書写に関する事項は「1〔知識及び技能〕（3）我が国の言語文化に関する事項エ（ア）用紙全体との関係に注意して、文字の大きさや配列などを決めるとともに、書く速さを意識して書くこと（イ）毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりを意識して書くこと（ウ）目的に応じて使用する筆記具を選び、その特徴を生かして書くこと」である。

6年生の授業では「三つの部分の組み立て方」を扱った。三つの部分からなる漢字は、左右・上下の文字の組み立て方を応用させた漢字である。お手本と自分の字を比較したり子供たち同士でアドバイスし合ったりすることを通して、三つの部分が互いに譲り合っていること、それぞれの位置関係や大きさなどを理解していった。また、漢字の特徴と穂先の動きを理解して文字を書くことを学習した。

〈方法〉

- ・練習した自分の文字と手本を比べ、さらに改善したいところや気を付けて書けたところを見つけていく。赤鉛筆で印をつけたり書き込んだりして、自分の課題を把握し、その解決に向けて練習をしていく。

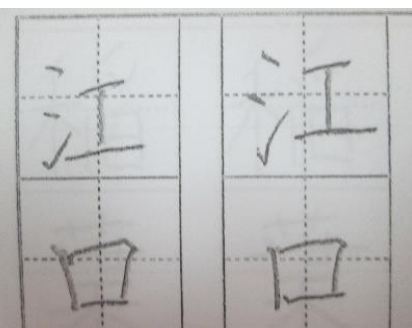
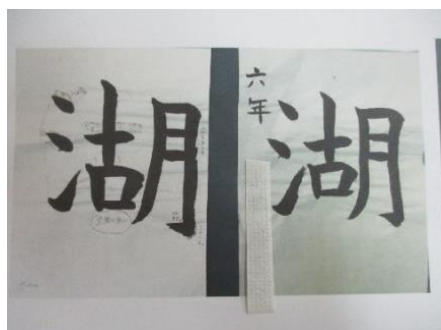
- ・グループの中でお互いに教え合ったり、励まし合ったりして意欲的に取り組んだ。互いにアドバイスをしながら練習を行うことができるのではないかと考え、風車形式を取り入れた。また、座席が近いこともあり、上手な児童の手元を見ながら練習することもでき、教え合いのできる学びの場の設定として風車形式の座席は有効であった。



- ・筆字、骨書き、枠線などのワークシートから、自分の課題にあったものを選び練習ができるようにした。自分の課題解決に合ったワークシートを選択し、練習を進めていく。その中で気付いたことを出し合い、書き方のコツとして黒板にまとめていった。
- ・教科書では三つの部分の譲り合いを猫の挿絵で分かる様にしてある。猫が両腕を挙げている絵で理解する児童も多かった。絵の得意な児童がさらに自分でアレンジした絵によって、特徴をつかんだ児童もいた。

〈結果〉

グループの中でお互いに教え合ったり励まし合ったりして、意欲的に取り組むことができた。普段なかなか書写で学んだことが日常生活に生かすことが難しい児童が多いが、板書を写すときや名前を書くときなどに「さんずいは二画目が出っ張るんだよね。」「稲葉の葉は、くさかんむりを大きくしない方がかっこいいんだ。」といった声が聞かれるようになった。



(3) 毛筆を日常的に

筆は書写の時間にだけ使う道具であると捉えている児童が、筆ペンを日常的に使用し休み時間に教え合ったり練習をしたりすることで身近な道具であると捉えていくことができるのではないかと考える。また、めあてカードを運動会のスローガンの周りや廊下に掲示したり6年生を送る会のプレゼントのしおりを書いたりすることで、相手意識をもって書くことの良さを実感できるのではないかと考えた。

〈方法〉

①筆ペンの常設

6年生の廊下に筆ペンを人数分用意し、運動会のめあてを円いカードに書いて廊下に掲示していった。また、筆ペンと共にワークシートを用意した。

②運動会の掲示物

運動会のスローガンは児童会が全校児童から募集し、タブレットで投票し、選んでいる。児童会執行部では、運動会スローガンを役員自ら書き初め用の筆を持って模造紙に書いた。大きな文字にもかかわらず、一度で作品を仕上げ、思いのこもった作品となった。とても柔らかな筆遣いで素晴らしい掲示物を作ることができた。6年生が書いためあてカードを周りにちりばめたスローガンは運動会当日までは全校児童の目に触れるよう玄関ホールに掲示をした。運動会当日は得点板の上に掲げられた。

③下級生へのメッセージを書いたしおり（相手意識）

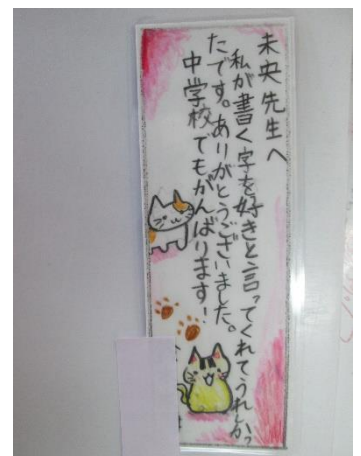
6年生を送る会の下級生へのプレゼントとして、しおりを作成した。

〈結果〉

①筆ペンで書くことがあまりなかったため、最初にか細い線で書く児童も多かった。しかし筆のもつ柔らかさを生かし強弱のある文字で書いたり、文字と絵を組み合わせで書いたりする児童も現れ、楽しんで何枚も書いていた。習字の授業では緊張して臨む児童も、廊下のシートを持ってきて、気軽に取り組んでいた。得意な児童に「ここはどうすればできる？」と教わる場面も見られた。

②去年までは「自分たちで決めたスローガン」だったが、今年は「自分たちで創り上げたスローガン」という思いをもって、見上げる6年生。卒業式の壁面装飾にも使用し、運動会の時には近くで見ることのできなかった保護者の多くの目に触れることができた。

③下級生に読みやすい字で書こうという相手意識で書いていた。「その学年で習った漢字を使ってあげよう。」「見本の字で書かなくては。」「この漢字は。ここは、はねるよね。」と、読みやすく書きたい、上級生として良い字を書きたいという思いをもって書いていた。



4. 成果と課題

研究仮説を元にして実践を重ねた結果、さまざまな成果と課題を得ることができた。

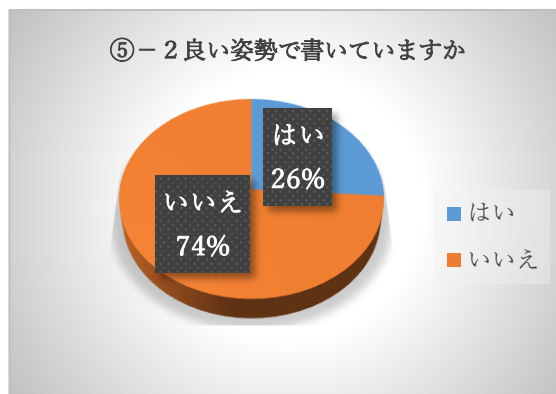
- (1) 正しい姿勢と正しい筆記具の持ち方を定期的を確認することで、正しい姿勢は楽に書くことができる姿勢であることが分かり、より読みやすく整っていて正しい文字が書けるのではないかな。

〈成果〉

定期的に正しい姿勢と正しい筆記具の持ち方を確認する良い機会となった。筆記具の持ち方においては、ノートを書く手が疲れると言っていた児童の持ち方を確認すると、指に力の入った状態で書いていることが分かった。正しい持ち方を意識したり「しょしゃ体操」をしたりすることで、少し書くときの力が抜け、ノートを書く速度も上がり、疲れにくくなったという成果も見られた。

〈課題〉

意識はできるものの、その意識が持続しないことが課題である。書く姿勢や持ち方を問題視していない児童は、そのときはできても、すぐに戻ってしまうという課題が見られた。また、高学年になると自己流で積み重ねてきたものもあるため、正しい持ち方をしようとしても簡単に改善することができないという課題も残る。早期発見・解決ができるよう導入時の1年生の時だけでなく都度確認していく必要がある。そして、家庭でも細かいところではあるが、見守ってもらえるような体制づくりを確立していく必要があると感じた。



- (2) 毛筆学習においても、他教科と同様に課題意識をもち、学習を進めることを大切にしていけることで、書くことをより身近に捉えることができるのではないかな。

〈成果〉

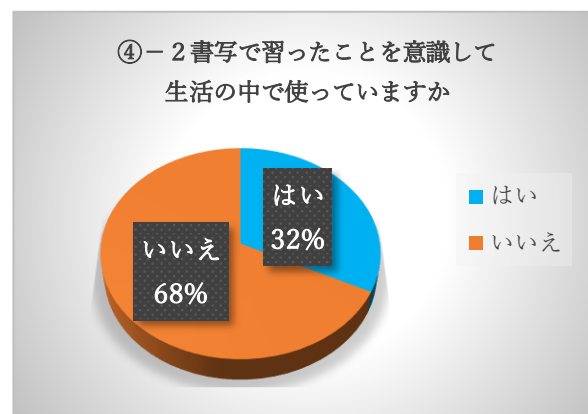
課題意識をもち、友達と練り合い考えを深めていくことで個人内での学びの成果を意識することができた。書くことに対しての苦手意識を少しでも払拭することができた。

「自分なりの精一杯で取り組めた。」「今までの中で一番うまくできた。」「お手本をよく見るってこういうことか。」と前向きな意見が増えてきた。書写の得意な児童の力を伸ばすとともに、苦手な児童へ書き方を教えるなど、児童同士の教え合いを取り入れたことも大きな成果につながった。教師の支援も

もちろんのこと、同じ目線でアドバイスできる児童同士の教え合いが児童にとって非常に有効だったと考えられる。

〈課題〉

「上手に書けないから。」という理由で書写の授業は楽しくない、という児童の割合が減ることはなかった。個人内の学びの成果よりも、作品を友達と比べてしまう意識の方が強いことが今後の大きな課題である。



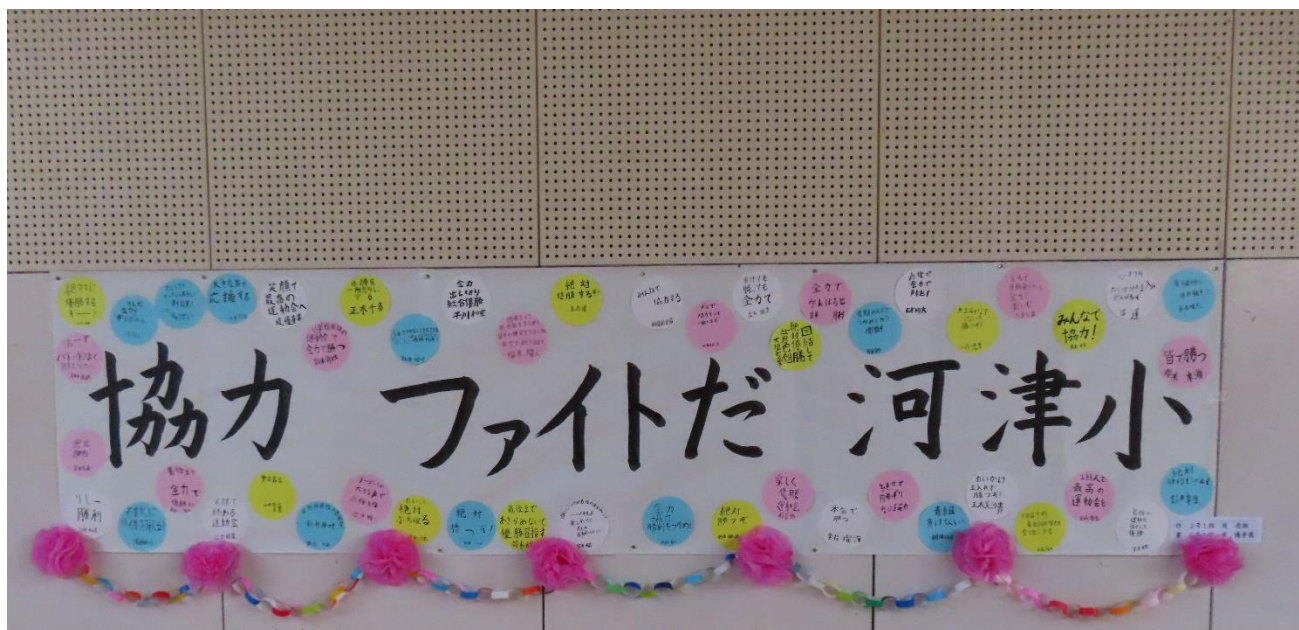
- (3) 筆ペンを廊下に常設し、筆は特別な筆記具ではないことや手書きの良さを知ったり興味をかきたてたりすることで、児童自身の生活場面の中に生かす力を身に付けられるきっかけになるのではないかな。〈成果〉

書写が苦手な児童も楽しんで活動できたことが大きな成果である。書くことを身近に捉えることができたのではないかと考える。また、筆箱にマイ筆ペンを常備する児童も出てきた。

〈課題〉

手書きのできに個人差があるため、積極的に毛筆に親しむ児童とそうでない児童がいることがわかった。興味はあってもなかなかその先の実践へと移れない児童もいる実態があることを踏まえて今後の指導を考えていきたい。

さまざまな手立てや活動を行うことで、文字を書くことに興味をもつ児童が増えたことは大変喜ばしいことである。これからも、児童の実態に応じた実践を行い、文字の素晴らしさ、自分で文字を書き表すことの楽しさを体験することを大切に活動を行っていきたい。



令和7年度

静岡県教育研究会 書写教育研究部 夏季研究大会

書写研究部テーマ

「正しく整えて書くことを生活に生かそうとし、
文字文化を大切にする子を育てる書写教育」

中学校テーマ

「文字のもつ力に気づき、
文字文化を生活に生かすことができる生徒の育成」

伊東市教育研究会 書写部

代表 伊東市立門野中学校

太田 泰成

～研究テーマ～

「文字のもつ力に気づき、文字文化を生活に生かすことができる生徒の育成」

1 はじめに

(1) テーマ設定の理由

「中学校学習指導要領(国語編)」には、「我が国の伝統的な文字文化を継承し、これからの社会に役立つ様々な文字文化に関する「知識及び技能」について理解し、文字を効果的に書くことができる力を育成することが大切である。」とある。「文字を効果的に書くことができる力を育成する」ために何を大切にすべきなのかを考えた。まずは、これまでの伊東市書写教育の課題を振り返った。これまでの書写教育では、「席書コンクール」や「書き初めコンクール」への出品を目的にし、書写教育を行うことが多かった。そこで、本研究を進める上で大切にすべきことは、「文字のもつ力」に生徒が気づき、書写を学ぶ動機が湧き、自らすすんで効果的に文字を書こうとする姿を引き出すことだと考えた。そのために生徒と共通理解したことを以下に示す。

- ア 文字文化と生活を関連づけて書くこと。
- イ 相手意識や目的意識をもって文字を書くこと。
- ウ 国語科の発展学習として書写を学ぶこと。

伊東市内の書写の授業者に以上3点を周知した。これら3点を踏まえて研究テーマを追求することにした。まずは生徒が「文字のもつ力」に気付くことが大切であると考えた。これは、書写を学ぶ動機づけでもあり、「文字文化」を生活に生かすことにもつながると考える。「文字のもつ力」とは、「文字は効果的に使うことで、人の心を動かすことができる力」である。また、「文字文化を生活に生かす」ことを最終的な目標とし、書写で学んだことを相手意識や目的意識をもって表現活動することを重点実践事項とした。「文字文化を生活に生かす」とは、「目的や相手を意識し、国語(書写)以外の場面でも文字を用いて表現すること」である。

(2) 研究仮説

文字を通して人の心を動かしたりする経験をすることで、文字のもつ力に気付いた生徒は、進んで文字文化を生活に生かそうとするだろう。

(3) 研究方法

実践前に生徒の実態を把握するために記述式のアンケートを実施した。

「A I テキストマイニング」でアンケート結果を分析したところ「どんなときに文字を書くか」という質問に対して「授業」や「勉強」という回答が多かった。また、「どんなことを意識して文字を書くか」という質問に対しては、「読みやすく」「見やすい」「伝わりやすい」という回答が多かった。相手意識もあるようだが、個別の回答を見ていくと「ノートを見返したときに読みやすい」といった自分のためになるように「読みやすく書く」という回答が多かった。「日常生活で書写を生かした場面」の質問では「普段の生活」や「楷書や行書」という回答が多く、生活において

書写で学んだ書体の活用をしている生徒が多いことが分かった。

これら分析結果から生徒は、書写で学んだ「知識・技能」を生活に生かしているが、その目的は自分の学習のためである。そして、文字そのものがもつ魅力を生かして表現する機会は少ないと捉えた。そこで、本実践では書写の時間を通して得た「知識・技能」を活用して文字そのものがもつ魅力を生かして、生活の中で「文字」を表現することをねらいとして活動した。また、そのねらいを達成するために以下の4点から各校の生徒の実態に合わせ、工夫を講じることとした。

ねらいに迫るための視点	
①ICTの活用	②教科書との関連
③単元構想の工夫	④書く動機づけ
※以下、実践報告の「エ ねらいを達成するための視点」で各番号と対応して記載。	

2 実践報告

(1) 1、2年生の実践(席書コンクールの指導を発展させた取り組み)

A 中学校の実践 ～1年生～

ア 単元名

「あなたの好きな言葉を行書で書いてみよう」

イ 単元の目標(書写の観点から)

- ・ 書体によって、見る人に与える印象が異なることに気付き、文字のもつ力に気付くことができる。 [知識及び技能] (3) イ
- ・ 自分が好きな言葉を、前回までの授業で学んだことや、自分で調べた運筆・字形を使い、相手を意識して書くことができる。 [思考力、判断力、表現力等] B (1) ア

ウ 単元構想

本単元では、まず行書についての学習から始める。身の回りの看板の書体を例にとりて提示し、どのような印象を受けるか話し合う。行書体や楷書体、明朝体、ゴシック体などのいくつかの書体を比較し、それぞれの書体から受ける印象について話し合う。行書の学習を行っていくことを伝える。単元の最後に「自分の好きな言葉」を行書で書く活動をするを伝える。

第2時からは席書コンクールの題字に取り組む。題字「月光」の楷書体と行書体で書かれたものを比較し、行書体の点画の特徴を考える。終筆から始筆への運筆や線の丸みなどの行書体の特徴を捉える。

第5時では、事前に選んでおいた自分の好きな言葉を行書体で書く活動をする。タブレットで筆法や手本を探し、練習する。行書体に適した言葉を生徒が事前に選び、お互いに書きながら意見交換する時間を設定する。書き終えた作品は廊下に掲示して、お互いの作品を鑑賞する。

エ ねらいを達成するための視点

視点① ICTの活用

タブレットで自分が選んだ言葉に使われている文字の行書体や筆法を見つけ、手本にしていた。事前に課題として自分が選んだ言葉にあった字形を選ぶように伝えてあったため、授業前にも互いの作品について話し合う姿が見られた。

視点② 教科書との関連

教科書 298 ページ「書体の特徴」と関連付け、身近にある企業のロゴ等の字体に注目させ、楷書体だけでなく、他の書体との比較を行い、行書体の特徴をより明確に提示した。

オ 実践の成果と課題

- △ 各自がタブレットまたは教科書の行書体一覧で調べながら書くことが出来たが、楷書体と行書体の区別がつきにくい文字もあり、それについては黒板で例示した。
- △ 語感の柔らかい言葉・優しい言葉を選んだ生徒もいるが、行書体の雰囲気に向かない言葉を選んでしまった生徒もいた。
- △ 調和体の言葉を選んだ生徒にはワークシートでサポートしたが、平仮名の練習が不十分だったので、苦戦していた。



B 中学校の実践 ～1年生～

ア 単元名

「私を漢字1文字で表すと……

～話の構成を工夫したり、字体の違いを意識して文字を書いたりして自己紹介をしよう～」

イ 単元目標（書写の観点から）

- ・ 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書で書くことができる。

〔知識及び技能〕（3）エ（ア）

- ・ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書くことができる。

〔知識及び技能〕（3）エ（イ）

ウ 単元構想

平成20年度告示の小・中学校学習指導要領国語編における書写は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に位置づけられていた。しかし、平成29年度告示の学習指導要領国語編における書写は、「知識・技能」の中の「（3）我が国の言語文化に関する次の事項」に位置づけられた。書写が「知識・技能」に位置づけられたことで「話すこと、聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」といった活動を支える基礎的な役割を果たすことがより明確となった。

細かく指導事項を見ていくと、平成20年度版と大きな違いは見られないが、「イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと」から「（イ）漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書くこと」となった。楷書とは異なる書き方、つまり、「点画の方向や形の変化」「点画の連続」「点画の省略」「筆順の変化」「丸み」などの特徴を理解した上で、日常的に使うことが、行書学習の目的であることがより強調されるようになった。

中学校の書写指導の実態を見ると年間に3、4回程度、席書コンクール出品に向けての書写指導になっているという学校も少なくはない。そこで、国語の年間計画を見直して書写指導が「話すこと、聞くこと」・「書くこと」・「読むこと」の指導に生かされ、書写の授業で学んだ知識・技能が日常的に活用できるような単元を構想した。

第1時には、教師が生徒に向けて「私を漢字1文字で表すと」をテーマとして自己紹介を行う。単元のゴールの活動を示すことによって生徒は見通しや目的意識、さらに相手意識をもって今後の学習に取り組むことができるだろう。教師が実演する際に楷書で力強く書いた「早」と行書で点画のつながりのある「早」の文字を見せて、どちらが今の自己紹介に合っているかと投げかける。この問いを考えることを通して、生徒たちは自然と楷書と行書の特徴の違いや受ける印象の違いに気づくであろう。その後、ワークシートを用いてより詳細に楷書と行書の違いについて理解を深めていく。さらに、楷書や行書で書かれた身近な看板やロゴをICT機器で紹介し、身近なところで楷書や行書が効果的に使い分けられていることに気づくきっかけとしたい。

第2、3時は、自分自身の性格や好きなこと、得意なことについてマッピングを行い、自己理解を深めた上で私を表す漢字1文字を決定していく。さらに「光村図書 国語1」に掲載されている「話の構想を工夫しよう 好きなことをスピーチで紹介する」を参考に、私を表す漢字1文字をもとにした自己紹介文の構想を考えていく。第4～6時では、席書コンクールに出品する「月光」を書く練習を通して、行書の特徴や書き方について学習する。かご書きなどを用いて楷書との違いや筆の入り、筆の運びについて実践的に学んでいく。

第7時では、第1時や第4～6時で学んだことをもとに私を表す漢字1文字を書く時間とする。今年の漢字を表す漢字1文字をタブレット端末で、楷書体や行書体を見比べ、どのような字体が適しているのかを自ら考え判断することができるようにする。字体が決まった生徒から半紙に書き完成を目指す。

第8時は自己紹介の練習を行い、第9時に発表会を開き、単元を振り返るという流れで学習を進めていく。（書写の実践のため、発表の練習や方法については割愛する。）

単元全体を通して、書写で学んだことは日常生活の様々な場面で活用することができることに気がつき、生徒自身が令和7年度の研究テーマである「文字のもつ力に気づき、文字文化を生活に生かすことができる」姿に期待している。

エ ねらいを達成するための視点

視点③ 単元構想の工夫(目的意識や相手意識をもつ)

コンクールに出品するための書写指導脱却のために「3. 単元構想」でも述べた通り、単元構想の工夫を行った。特に第一時では、教師の自己紹介の例をもとに、自分を表す漢字1文字を書いて自己紹介をすることや身近な看板やポスターに書かれている字体について全体で確認することで、文字を書くにあたっての相手意識や目的意識をもたせた。



一人一人が書いた文字を見せて自己紹介を行った。文字を書いて終わりではなく、その文字を選んだ理由や文字に込められた思い、書いたときの工夫点などを級友に伝える姿が見られた。

視点③ 単元構想の工夫（作品の鑑賞方法）

書いた作品は自己紹介で用いた後掲示した。1組前廊下に2組の作品を、2組前廊下に1組の作品を掲示した。一日ごとに生徒の書いた作品を変えることで一人一人の作品をじっくり味わうことができるようにした。作品にはスピーチ原稿や字体の工夫が書かれたワークシートを共に掲示した。



左側の作品を1日ごとに右の掲示物に重ねていった。毎日掲示物が変わるため生徒たちは一人一人の作品についてじっくりと鑑賞することができた。「優」を書いた生徒は、ワークシートの字体や書くときに意識したところの記述に「優しさがあふれるように半紙いっぱい優を書いた。ゆっくりとやわらかく書くことで優しさを表した」と記述した。「神」を書いた生徒は、自分自身が20代目の神主になることを伝え、みなに興味関心を引く自己紹介をする姿が見られた。

視点④ 書く動機づけ（生徒の主体性を生み出すための自己選択）

席書コンクールに出すために決められた文字を何度も練習する授業では生徒が主体的に学んでいるとは言えない。そのため、自己紹介に用いる漢字を各自で選択したり、字体においても楷書や行書は自由にしたりした。ICT機器を用いて自分の選択した漢字の字体や文字の太さなどを確かめの中で、自分が本当に表したい、文字、字形を見つけ出して主体的に書くことができるようにした。



ICT機器を用いて私を表す漢字の字体を調べて選択する姿が見られた。中には行書と楷書の両方を実際に書いて、字体から受ける印象の違いについて考える生徒も見られた。

視点④ 書く動機づけ（日常生活での実践につながる振り返り）

研究テーマである「文字のもつ力に気づき、文字文化を生活に生かすことができる」ように単元の振り返りを行った。振り返りの項目の中で「今回学習したことを通してどんなところが成長しましたか。また、今後どのようなことに役立てられそうですか。」という項目を設定し、書写で学習したこと日常生活の中でも実践できるように促した。

オ 実践の成果と課題

- 自分で好きな文字を選んで書くことができるため、どの生徒も主体的に学習に取り組む様子が見られた。書いた文字を互いに見せ合い、アドバイスし合う姿も見られた。
- 生徒の振り返りの中に「今後、班のポスターや掲示物を書くときのデザインとして役に立ちそうだと思います。」「年賀状を書くときに筆ペンを用いて行書で書いてみたい」など、日常生活の中で生かそうとする振り返りの記述が見られた。
- 生徒の振り返りに中に「この漢字は行書で書くか、楷書で書くかななどの想像力が成長したと思います。想像力が高まると美術や技術でもものを作るときにもいろいろな発想につながり役立つと思います」など、他教科に生かそうとする振り返りの記述が見られた。
- 生徒の振り返りの中に「今までは書写が下手で苦手だと思ってやっていたけれど、書写の楽しさを感じつつ一生懸命やろうと思うことができた」など書写に対する意欲向上が見られた。
- 実践後、班の掲示ポスターなどで字体を意識して掲示物を作る姿が見られた。
- △ 授業時間数の調整を丁寧に行う必要を感じた。上記の実践は約9時間を費やした。年間の計画をしっかりと見直して実践する必要がある。

C 中学校の実践 ～2年生～

ア 単元名

「書体を選択して書く～自分たちの今年の漢字を書こう～」

イ 単元の目標（書写の観点から）

- ・ 行書体と楷書体の特徴を理解して書き、書体の違いによって与える印象を捉えることができる。
〔知識及び技能〕（3）イ
- ・ 「私の今年の漢字」を表す適切な1文字を考えて、学級に伝えるために適切な書体を選択して文字を書くことができる。
〔思考力、判断力、表現力等〕B（1）ア
- ・ 行書体や楷書体のもつ特徴を理解して書こうとし、適切な書き方を判断して目的に応じた文字を書こうとしている。
「学びに向かう力、人間性等」

ウ 単元構想

書写に関する指導事項は「我が国の言語文化に関する事項」として、国語科で指導すべき事項であるとされている。書写の指導は小学校第1学年から中学校第3学年までの系統による積み重ねで成り立つ。中学校の指導では、楷書体と行書体という異なる書体の特徴を理解し、目的に応じて選択して表現することが求められている。小学校で学習した楷書による基本的な点画の書き方を基にして、行書の特徴を理解することで、表現による選択の幅ができる良さがある。

本単元は2次の小単元に分けて指導する。第1次では行書の特徴に対する認識を確かめたり深めたりする学習をする。第1次の導入で、書体が変わることによる印象の変化を考える活動を行う。伊東市の街にある看板の文字が例えば、行書体から楷書体、あるいは活字に変わったときにどのような印象の変化を受けるか考える。書体が変わることによる印象変化について自分の考えをもつことで「目的や必要に応じて、楷書または行書を選んで書くことができる。」という単元の目標に向かう動機づけとしたい。看板の行書体について中学校1年生で学習したことを確認するところから新しく覚える行書体の特徴について学習していく。

中学校2年生では、行書体の特徴として「点画の省略」と「筆順の変化」を学ぶ。「雲海」という文字について楷書体と行書体とで書かれたものを比較することで、どのような違いがあるのか考える。行書体の特徴が「読みやすく速く書くための技」であることを学び、実際に書く活動へと移っていく。行書体の特徴を理解した生徒が技能として修得するためには臨書が効果的である。書く活動中は、集中して書く時間と書いた文字について考える時間を設けたい。行書の特徴を良く表現できている作品を見合いながら、自分自身の技能を磨く意欲につなげたい。

第2次では、行書の特徴を理解した生徒が書体を選択して自分の創作活動に取り組む。清水寺で書かれる「今年の漢字(日本漢字能力検定協会)」の様子と近年の「今年の漢字」を紹介する。紹介した後に、「自分の今年の漢字を表すとしたら何がいいだろう」と投げかける。生徒は思い思いの漢字を思い浮かべるだろう。そこで、学習した行書体か楷書体のいずれかを選択して一文字を書く活動をすることを伝える。一文字書いたものや自分の思いを表す一文、解説文の3つを書いて教室掲示する。それぞれの作品が出来上がった後に、お互いの作品を見合って鑑賞する時間を設定する。

本単元を経て、文字には人の心を動かす力があり、生活に生かすことができるものであるという意識の向上を期待している。

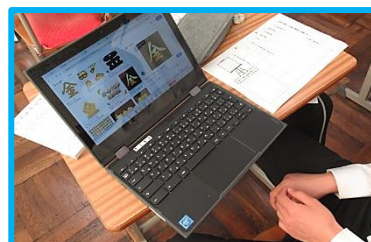
エ 目標を達成するための視点

視点① ICT機器の活用

本単元の第2次では、「自分自身で文字を選んで書く」という活動を行った。また、書体の選択もあるため、授業者1人では授業内で対応しきれないことが想定された。そこで、1人ひとりに配付されている「ICT機器」を活用した。楷書体（行書体）といっても書き手によってさまざまな文字の形があり、生徒は納得のいくまで、自分自身の思いが込められる文字を探していた。しかし、どのような運筆をすれば、探し当てた文字が書けるようになるのか疑問に思う生徒がいた。そこで、お互いに意見を求めたり、授業者に書かせたりする時間が自然に生まれた。「自分で選んだ文字」であることが生徒の活動に反映したのだと考えられる。



漢字の学習帳で字を探す生徒



タブレットで書体を探す生徒

視点③ 単元構想の工夫（目的意識や相手意識をもつ）

本単元の最後にそれぞれが書いた文字を鑑賞し合い、コメントをする場を設定した。お互いの文字を見合って、その思いに触れた。書体選択の意図や書きぶりに表れた思いをお互いに交流した。コメントカードに書かれた内容は、第1次で学習したことを生かしたことが述べられていたものもあった。

結果的にそうなったのだが、単元終了時期が3者面談に近づいていた頃だったため、廊下掲示も行った。保護者から「息子がこんなにきれいに文字を書くなんで。」や「見られてよかったです。」といった声をいただいた。

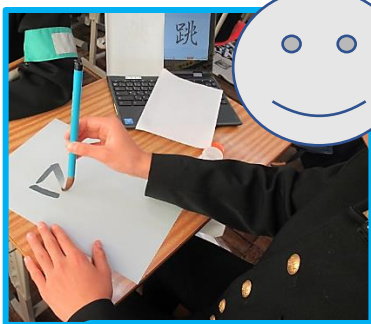


・とめ・はね・はらいの正しいやり方、名前の正しい崩れ方を
知りやすくなった。
・字にこめられている思いが分かるようになった。
・自分の一年を振り返り、一文字を表すことができ、信念が
さらに固まった。
・文字を書くことで言葉と文字に込める 思いの込め方
の理解度が深まった。
筆の運び方や書く時の心の持ち掛け方
について理解が深まった。

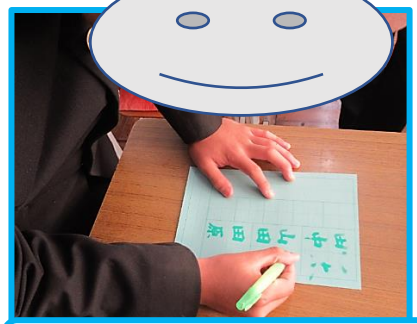
視点④ 書く動機づけ（水書の活用）

書写の時間では、硯を用意して墨を出し、紙に向かって筆をとる。この基本的な流れが繰り返される。その一つひとつは、さほど難しくない。しかし、生徒の中によって「墨がありません。」や「筆が割れています。」といった道具の実態はさまざまである。道具を準備する、「書く」というだけで心折れてしまう生徒もいる。

そこで、道具の準備を最小限に抑え、生徒にとっての数々の障害を除去したものを用意した。「水書用筆セット」だ。授業内で、道具が揃わなかった（道具が使い物にならなかった）生徒に貸し出した。新鮮さも相まって、楽しそうに文字を書いている姿が見て取れた。また、授業が始まる前の休み時間に、教卓に「水書用筆セット」を置いた。特に何も言わなかったが、気になった生徒が寄ってきて、思うままに文字を書き始めた。「文字を書く」ということに対して意欲的であることを体現しているようだった。



道具を忘れたが、水書で練習する生徒



休み時間に水書で字を書く生徒

オ 実践の成果と課題

- 席書の題字を単元の一次として扱い、自分自身の課題をもって発展学習に臨む構想がよかった。手本を見ながら自分で書くという「書写」の醍醐味を経験できた。
- ICT機器の活用と授業者の手本が効果的な支援になっていた。授業者だけでは対応しきれない部分があるが、ICT機器があることによって生徒自身の力で学びに向かうことができる。
- 「鑑賞」という交流の時間を設けることで、お互いに「誰かに見せる」という目的意識がついて、学習意欲につながった。
- △ 「今年の漢字を書こう」と言語活動を設定したが、必要感をもたせることができたのか疑問に残る。今回は学級内での交流となったが、見せる対象を変えることで、生徒の取り組みも変わると感じた。
- △ 第一次の学習では、「雲海」の臨書をとおして、行書の特徴を学習した。生徒同士で上手に書こうと励む姿があった。授業者は、行書で不自然な雲海を書いて、改善すべき点を生徒と考えた。しかし、行書の特徴を一人ひとりがどれほど頭にインプットできたかを確かめることはしなかった。書かれた文字を見れば分かるかもしれない。ただ、何をもって行書の特徴を「理解した」とするのか曖昧になっていた。

(2) 3年生の実践(国語科教材「故郷」と関連づけた取り組み)

D中学校とE中学校での実践 ～3年生～

ア 単元名

「本から考える人生～人生の先輩として後輩に素敵な本を紹介しよう」

イ 単元の目標（書写の観点から）

- ・ 同じ文字にもたくさんの形やデザインがあることを知り、文字や筆記用具が与える印象や効果の違いを理解することができる。〔知識及び技能〕(3) エ (ア)
- ・ 目的や相手に応じて、適切な筆記具や文字のデザインを選び、工夫して文字を書くことができる。〔思考力、判断力、表現力等〕B (1) ア

ウ 単元構想

中学校国語科における書写教育では、第2学年までに、楷書体と行書体それぞれの書体の特徴を理解し、目的に応じて選択して表現することを学んでいる。第3学年では、それらを総合的に発揮させ、実社会・実生活の中で活用できるようにしていくことが求められる。そのためには、手書き文字をはじめ、活字やイラスト文字、デザイン文字など、社会生活で使用されている多様な書体や字形にも触れる必要がある。

本単元では、国語の教材である「故郷」の学習に関連させて書写の指導を行った。「故郷」では、教材を通して、人生について考えるという大きなテーマを設定し、単元の終末には、「故郷」以外の作品を用いて、本の紹介ポスターを作成した。

まず、導入として、身の回りから効果的な文字の使い方を探す活動を行った。楷書体や行書体以外の文字のデザインにも注目し、その文字を使うことでどんな印象を与えるのかを考えた。この活動を行うことにより、自分がポスターを作成する際、その本のイメージに合う字体や筆記具を選択できるようにしたいと考えたためである。

その後、「故郷」の学習を進めると同時に、生徒には紹介する本を選んでおくように声をかけた。本の種類は特に設定せず、人生を考えるきっかけになったものであれば可とした。そこで選んだ本を用いて、単元の終末には紹介ポスターを作成した。ポスターには、題名、キャッチコピー、あらすじ、その本が自分の人生に与えた影響を必ず書くこととし、字体や用いる筆記具は各自で考えて選択することとした。ポスターは学習発表会で展示し、鑑賞した下級生が感想を伝えられるようにした。

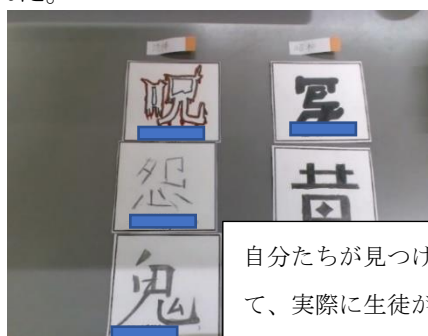
本単元を通して、文字は効果的に用いることで人の心を動かすことができると気づき、実生活でも進んで文字を用いることができる生徒を増やしたいと考えた。

エ 目標を達成するための視点

視点① ICTの活用身の回りから効果的な文字の使い方を探す際、生徒が見つけた文字をタブレットで撮影し、全員で共有できるようにした。これにより、書写の授業においても協働的な学びができ、文字がもつ力について積極的に話し合う姿が見られた。



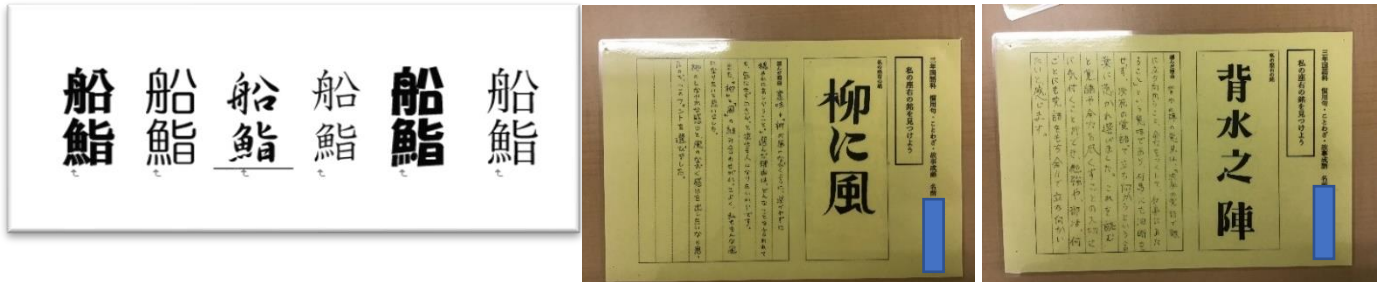
何気なく見ていたポスターや、Tシャツの文字も、書き方によって感じ方が変わることに気付いた。



自分たちが見つけた文字の字体を真似て、実際に生徒が書いてみたカード

視点② 教科書との関連

「故郷」の単元に入る前に、文字の効果について考える単元を設定した。「慣用句・ことわざ・故事成語」の中から今の自分の座右の銘を決め、文字で表現した。またこの単元の導入では、同じ文字の複数のフォントを用意し、フォントの与える効果について考えた。「自分がお寿司屋さんを開く際にどのフォントを採用するか」という問いに対し、多くの生徒が行書体を選んだ。その理由として、「お寿司は和のものだから、一番、和っぽい行書体にした」という意見が多かった。



視点③ 単元構想の工夫(主体性を引き出す発問)

これまでの書写の授業では、教師から一方的に指示を出して、生徒は黙々と作業に取り組むことが多かった。しかし、今回は、生徒が考えたいような、課題解決型の発問を投げかけた。例えば、教師が見つけたケーキ屋と焼き肉屋の看板を提示し、「2つの看板の文字が入れ替わったら受ける印象はどうなるだろうか」と投げかけた。すると、自然と対話が生まれ、自分たちも効果的な文字を見つけに行きたいという思いをもつようになった。また、本のポスターを作成する際は、相手意識をもたせるために、「後輩が読んでみたくなるようなポスターにするにはどんな工夫が考えられるだろうか」と投げかけた。すると、要約の仕方やキャッチコピーの付け方に加え、字体の工夫や、筆記具の選択の工夫を挙げる生徒の姿が見られた。

A

本の内容に合うような
字体を選択した作品

【作品を鑑賞した後輩からのコメント】

A 文字の漢字が他にない個性的な文字だった。
A ゴジラは強くて怖いイメージがあるので明朝体を使ってよりゴジラの強さと迫力が感じられた。

B

デザイン文字を用いて
後輩の興味をひいた作品

【作品を鑑賞した後輩からのコメント】

B 題名のフォントが自分流に作品に合うようなフォントで書かれている。
B 字体がすごくて単純だけど奥が深いこの本の世界観がよく表現されていてすごいと思った。

C

本の雰囲気に合わせた筆記具
(筆ペン) を選択した作品

【作品を鑑賞した後輩からのコメント】

C 字体の1つが明朝体でもう1つがゴシック体で目が引つけられた。
C 字体が明朝体で日本を表しているように見えた。まさに太宰治。

オ 実践の成果と課題

- 作品を鑑賞した下級生のコメントを読み、文字が人の心を動かすことを実感できた。
- ねらいとしていたフォントが与える文字の印象の違いを感じている生徒が多くいた。
- 筆記用具として筆ペンをあらかじめ用意したことで筆ペンに挑戦した生徒が多くいた。
- △ 座右の銘に同じ漢字が入るものが多く、字体が似通る生徒が多かった。
- 個々が見つけた文字をタブレットで共有することによって、自分では気付かなかった多様な表現に触れることができた。
- △ 共有する際の視点を定めておくとうよかった。
- 書写に対し、苦手意識をもっていた生徒も楽しみながら課題に取り組めた。
- 書写を独立した学習と捉えず、普段の国語の授業に関連させながら取り組むことができた。
- △ 生徒自身がつ書く力や表現力によって、作品の出来映えに差が生じた。

3 研究のまとめ（仮説検証）

（1）文字を通して人の心を動かしたりする経験について

文字を通して人の心を動かしたりする経験は、「私を表す漢字1文字を使った自己紹介」「自分の今年の漢字」「私のオススメ本紹介ポスター」「私の座右の銘」の取り組みにおいて、できあがった作品を誰かに見せた時に相手から寄せられたコメントの内容を読んだ時や、同じ文字を違う字体で書いた時に感じる印象の違いから、文字が人の心を動かしたことを実感することができたようだ。

「誰かに見せる」ことを意識することで生徒の学習意欲が高まり、多様な表現への気づきにもつながった。対象は、普段から一緒にいる同じ学級の仲間が基本となるが、他学級や他学年の生徒や来校した保護者にした方がより生徒のやる気に火がついたといえる。また、どの取組にも共通していることは自分で文字や言葉を選べることであった。その文字を選んだ理由や工夫点を級友に一生懸命伝える姿や書写が苦手な生徒が「楽しかった、一生懸命やろうと思えた」と話す姿からは自分で選べるのが生徒の主体的な活動につながったことが伺えた。水書セットや筆ペンを生徒の身近に用意したことも生徒の主体性を引き出すことに効果的に働いたと言える。さらにICTの活用は、自分の力で課題を解決することに大いに役立った。

（2）文字のもつ力に気づいた生徒について

「私を表す漢字1文字を使った自己紹介」の取り組みにおいて、「優」という文字を選んだ生徒が半紙いっぱいに「優」と書き、ゆっくりとやわらかく書くことで優しさを表した」とコメントし、「自分の今年の漢字」「私のオススメ本紹介ポスター」「私の座右の銘」などの活動においても活動後の「自分の1年を振り返り、1文字に表すことで信念がさらに固まった」「お寿司は和のものだから、一番、和っぽい行書体にした」「何気なく見ていたポスターやTシャツの文字も、書き方によって感じ方が変わるな」「行書と楷書を使い分ける想像力が高まった」といったコメントからは生徒が文字のもつ力に気づいたことが伺えた。

（3）進んで文字文化を生活に生かそうとするについて

生徒が活動後に「今後、班のポスターや掲示物を書くときのデザインとして役に立ちそうだと思う」「年賀状を書くときに筆ペンを用いて行書で書いてみたい」と言っている生徒がいた。実際に班の掲示ポスター等で字体を意識して掲示物を作る姿が見られた。

(4) 実践を通して感じた課題

ア 生徒はタブレットや教科書を使って行書体を調べながら書いたが、楷書体との違いが分かりにくい文字もあり、黒板で例示して補足した。語感に配慮した言葉選びをする生徒もいたが、行書体に適さない言葉を選んだケースもあった。調和体を意識した生徒にはワークシートで支援したが、漢字仮名交じりだとひらがなの練習不足により苦戦する場面も多く、授業時間数の調整の必要性を感じた。

イ 「今年の漢字を書こう」という言語活動を設定したが、生徒にとっての必要感が十分だったか疑問が残った。交流の対象を工夫することで、生徒の取り組みに変化が生まれる可能性があると感じた。

ウ 「座右の銘」に使われる漢字が似通っていたため、作品の個性が出にくかった。選択した文字をタブレットで共有するときの視点設定が不十分で、生徒はどのように自分の作品に取り入れればよいかが分からず、生徒の書く力や表現力によって作品の完成度に差が生じた。

エ あくまで国語(書写)の時間での実践だったため、その後で生徒がそれぞれの生活でまなんだことをどのように生かしたのか見届けることが難しかった。

4 研究を振り返って

「どうしたら生徒が書写を楽しく学習できるだろうか」という私たちの共通の思いからスタートした実践だった。多くの生徒が学習課題に向かってひたむきに学習に取り組んでいた姿からは、本実践を通し、これからの書写教育の方向性を書写部員が共有することができた。

「文字を通して人の心を動かしたりする経験をすることで、文字のもつ力に気付いた生徒は、進んで文字文化を生活に生かそうとするだろう。」という研究仮説については、4つの視点に沿って授業実践を行ってきた。文字を書くことに対する生徒の思いは強く、生徒が自分ごととして活動に取り組むことでその思いがより一層増すことが感じられた。また、書く意欲をつなぎ、伸ばすためにICTの活用はとても有効だった。今回の研究を通して生徒は、文字のもつ力に気付くことはできたと言える。しかし、文字文化を生活に生かそうとしていたかについては、書写の時間だけでなく、あらゆる教育活動で見届ける必要がある。日々の学校生活や行事、家庭での取り組みまで見るのが理想である。その点においては、仮説の検証はしきれていない。日々の生活の中に書写が生かされることを目指して、「文字のもつ力」を書写の時間にとどまらず、あらゆる場面で伝えていきたい。



C 中学校学期末
実践クラスの写真